

第4回 企業DXを推進する指標の在り方に関する検討会
議事要旨

日時：2025年5月23日（金）11:00～13:00

場所：オンライン

出席者(敬称略)：

【委員】

宮村 和谷	座長	出席	PwC Japan 有限責任監査法人 執行役
岡田 浩一	委員	出席	明治大学経営学部 教授
亀山 満	委員	欠席	グローピング株式会社 シニアエグゼクティブアドバイザー
志濟 聡子	委員	出席	合同会社アイシスコンサルティング 代表
田口 潤	委員	欠席	株式会社インプレス 編集主幹 兼 IT Leaders プロデューサー
野中 誠	委員	出席	東洋大学経営学部経営学科 教授
野村 真実	委員	出席	特定非営利活動法人 IT コーディネータ協会 会長

【傍聴】

一般社団法人日本経済団体連合会
公益社団法人経済同友会
日本商工会議所
全国商工会連合会
一般社団法人情報サービス産業協会（JISA）
一般社団法人ソフトウェア協会（SAJ）
一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA）
一般社団法人日本情報システム・ユーザー協会（JUAS）

【事務局】

独立行政法人情報処理推進機構（IPA）
経済産業省 商務情報政策局 情報技術利用促進課

議題：

1. 開会
2. 事務局資料説明
3. 討議
4. 閉会

配布資料：

資料1 議事次第

資料 2 委員名簿

資料 3 事務局説明資料

議事概要：

企業 DX を推進する指標の在り方に関する議論

事務局より資料 3 に基づき、前回の振り返りと本会議の論点となる「システム構築に伴う各論点」、「具体的な成熟度レベルの考え方」「DX 推進指標（仮）の具体的な設問について」について説明及び各委員から意見を伺った。

委員からの主な意見は以下の通り。

・ **論点①-A システム構築に伴う各論点（指標の提出手段を Excel とするか、Web フォームとするか）**

- Excel は使いやすいが古い形式であり、今後のデータ活用を見据えれば、数値化・データ化に適した方向に移行すべきである。
- Web フォームによって各部門が個別に回答することで、多様な意見を把握できる。企業が意見を集約する場合もあるが、多様なデータがある方が良い。Excel は配布や集計がしやすいが、AI を用いた各部門の回答を統合できる機能も視野に入ると、Web フォームの利便性は高いと感じる。
- 中小企業が Web フォームを求めていることも含め、将来的なことを考えると Web フォームの方が柔軟性が高く適していると考える。
- 各企業が提出したデータに対して、スピード感をもってフィードバックすることは重要である。各企業への迅速なフィードバックを実現するためには Web フォームが適しており、Excel では難しいと考えられる。
- 社会全体として Excel から Web フォームへの移行が進んでいる。DX 推進指標の事務局が率先してデータ共有の仕組みを構築することが望ましいことから、Web フォームを推奨する。
- 総括として、実装面で制約が生じない限り、指標の提出手段は Web フォームとする。

・ **論点①-B システム構築に伴う各論点（記述の項目を設けるか）**

- 記述の項目は設けた上で、任意とするのが良いと考える。中小企業への配慮の観点から任意が望ましいが、分析の観点では本来は必須が望ましい。また、入力内容が履歴として残るような仕組みがあると良い。
- 活用の観点では、変化が見えるようにしておくことが望ましいと考える。
- 設けた上で、任意とするのが良いと考える。判断基準の記載を許容することで、傾向分析なども可能になる。

・ **論点①-C システム構築に伴う各論点（企業の目標値を入れる仕様とするか）**

- 企業が 3 年後の目標を設定することは重要であり、項目ごとに目標を設けることで具体的な議論を促すことができる。

- アメリカ政府のように、現状のステータスに加えて今後の変化を上矢印や下矢印などで示す方法は、意欲や重点分野を明示するのに有効である。
- 現状、今後の取組、目標の3点セットで議論することを促す仕掛けとして、目標値は設けるべきである。また、分析レポートで企業種別ごとの目標のレベルを提示しており、この観点からもあった方がよい。
- すべての企業が利用するわけではないため、任意の形で設けるのが妥当と考える。

・ **論点② 具体的な成熟度レベルの考え方について**

- レベル3とレベル4の違いは「持続的」と「部門横断的」の有無の差となっている。部門横断的は理解しやすいが、持続的という表現の明確化が必要と考える。
- 持続的について、PDCAが全社的に回っているのは一つの理解であるが、より詳細な説明がある方が、認識相違が発生せず良いと考える。
- レベル3は、全社戦略があるが各部門の取組の統制が取れていない状況。レベル4は、全社戦略や経営目標が各部門に理解され、その経営目標達成のために具体的にアクションしPDCAが回っている状況であると理解している。例えば経営目標を達成するための人材育成、組織風土改革などを全社として各部門が実施している状況と考える。
- 持続的については言葉で表現するのは難しいため、図で表現するのがよく、ユーザーに提示できれば良いと考える。
- レベル4では、単に取組を持続することは前提であり、同じことを何年も繰り返すだけでは不十分だと思う。前年の状況を踏まえて各部門が課題を考え、それらを全体として統合しながら継続的に改善・発展させていく状態が、レベル4の姿だと考える。
- これまでの意見をできるだけ反映して、レベル3と4の明確化を行う。また、レベル4を達成したらどのような姿になるのかを別途、図などを用いて示していくのは一つの方法である。
- レベル5のイメージについて大変良いと考える。今は組織と個人のアイコンによってビジネスのイメージを表現しているが、学校のアイコンなどを使うことで多様な主体との関係性を表現できると思う。
- レベル5は、サプライチェーンに加え、業界や官民といった様々なステークホルダーのリーダーシップを取っているというイメージがあるため、「ステークホルダー」という用語を入れられると良いと考える。
- 社会課題という表現は非常に幅広くとらえることができ、表層的な取組にも当てはまる可能性があるため、例えばレベル5は「業界のリーダー」や「社会的価値の創出」など、上手く伝えられる表現ができると良いと考える。
- レベル5は、自らリードしている企業が該当すると考える。例えば、個社の取組を超えて社会価値を創出するリーダー的な企業が該当する。

以上